

引き継がれる技



北山村の林業を 支えてきた 筏師の権さばさ 筏下りと筏師の道

木の国とも称される和歌山は、面積の4分の3以上を森林が占め、昔から優れた木材を産出する林業が盛んなクニだった。なかでもじゃばらの発祥地である北山村の木材は、伏見城の建材に選ばれるほど上質なもので、林業は数百年以上に渡って北山村を支える重要な産業であり、住民の多くがそれに従事していた。そして山奥で切り出した木材を筏に組み急流を下り、河口の街・新宮市まで届けたのが筏師だった。

「昔の筏師の賃金は良く、憧れの職業でした。しかし自然と向かい合う危険な仕事でもあり、事故で亡くなる方もいました。特にここはオトノリと呼ばれる難所。跡取りである長男には乗らせるな、弟が乗る場所」ということでオトノリと呼ばれるようになったそうです」と語るのは北山振興株式会社で活躍する山本正幸

さん。北山村で生まれ育ったが、大阪で就職、結婚し、子供にも恵まれたが、北山村の筏師の募集を見て故郷へ戻った。「昭和30年代後半にはダムが建設され、木材運搬はトラックに代わられました。しかし人が乗り権で操作する筏下りは、600年に渡り和歌山にだけ引き継がれてきた技。その歴史と筏師の技能を後世に伝えるためにと考案されたのがこの観光筏下りで、運輸省(現国土交通省)に認可された唯一のもの。その筏師養成プロジェクトに参加し筏師になりました。

筏師たちは木材を運んだ後、新宮から「筏師の道」と呼ばれる道を3日ほど歩いて戻った。「道といっても舗装どころかまるでげもの道」。そこを重い權を担いで歩くわけです。とはいえ車などない時代ですから、当然だったんでしょうが(笑)。実は北山村が全国で唯一の飛び地の村になったのも筏師が結んだ縁といわれています。廃藩置県の際、隣接している三重県への編入も検討されたそうですが、村民投票の結果、材木の取引で縁の深い新宮市が和歌山県に編入されるなら、北山村も和歌山県に「なったそうです」。急流を筏で下り、険しい筏師の道を歩いて戻る。それは木材を運ぶだけの道ではない。和歌山との縁を結ぶ絆の道でもあった。

①オトノリと呼ばれる筏下りの難所で、観光筏下りのスタート地点。まるで地球の裂け目のようにゴツゴツ。②スリル満点の観光筏下り。年間7000名ほどが体験に訪れる。じゃばら。とともに北山村を支える重要な産業のひとつ。③筏師の道のウォーキングコースのほぼ中間に位置する立合川(たちあごう)にかかる吊り橋。④筏師になって22年という山本さん。杉の丸太8本で組まれた一床、を7つつなぎあわせ、全長約30mにもなる一連の筏で、急流を下っていく。一般的に先乗り、舵取り、後乗りと呼ばれる3人の筏師が乗り込む。

北山振興株式会社
住所／東牟婁郡北山村大沼87
電話／0735-49-2253

